

要 旨

本研究は、生徒同士のサポート活動を通して、個々の承認感を高め、自信をもって他者と関わろうとする生徒を育成するための支援の在り方を追求したものである。対象学級や対象生徒の事前調査や先行研究を踏まえ、実態に応じたトレーニング内容を構成し、プランニングを行ってサポートを実践した。その過程で承認感を高めるための手立てとして、意図的グルーピングやピア・サポーターの育成の工夫、認め合う場面の工夫を行った。その結果、個々の承認感が高まり、意思表示がうまくできなかった生徒が自信をもって積極的に他者と関わることができるようになった。

〈キーワード〉 ①承認感 ②ピア・サポート

1 研究の目標

自信をもって他者と関わろうとする生徒を育成するために、生徒同士によるサポート活動を通して個々の承認感を高める支援の在り方を探る。

2 目標設定の趣旨

児童生徒を取り巻く環境が急速に変化してきた現代社会において、いじめ、不登校、学級崩壊など学校が抱える問題は山積している。インターネットや携帯電話が普及し、顔の見えない関わりが増える中で、人間関係の希薄化や社会性の育成が不十分であることなどが指摘されている。このような課題を踏まえ、2008年3月に改訂された学習指導要領の特別活動の目標では、児童生徒の社会性の育成やよりよい人間関係づくりがより一層重視されるようになった。

中学2年生の対象学級においても、不用意な言葉を発して相手との関係を崩してしまったり、相手の言葉に過度に反応して自信を失い、他者と関わることをやめてしまったりする生徒が見られる。5月に実施した「Q-U」アンケートの結果では、学級生活満足群にプロットされた生徒が全体の51%いる一方で、41%の生徒は非承認群と学級生活不満足群にプロットされていた。また、学級全体としてルールや行動規範は共有されていて大きなトラブルは起きにくいものの、学級内で認められて意欲的に活動できている生徒とそうでない生徒とが明確に分かれていることや、学級内のリレーションの確立が弱い状態の中で、生徒間の相互理解や交流が不足していることが分かった。これらのことから、学級内の生徒同士の関わりが少人数の限られたグループ内にとどまっており、生徒たちは孤立への不安から他のグループの生徒と関わろうとする意欲が高まらず、互いに閉鎖的で、関わりが広がっていないのではないかと考えた。

このような生徒の実態から、仲間との関わり方を学びながら互いに認め合うような場面を設定し、生徒同士の交流を通して、学級内の人間関係を広げていくことが必要であると考え、ピア・サポートに着目することとした。ピア・サポートとは「子どもたちの対人関係能力、社会に生きる力がきわめて不足している現状を改善するために、教師の指導・助言のもとに、子どもたちの相互の人間関係を豊かにするための学習の場を各学校の実態に応じて設定し、そこで得た知識やスキルをもとに、仲間を思いやり、支える活動」<sup>1)</sup>のことである。その際行われるサポートには、具体的な手助けをすることや一緒に行動することの他に、褒める、励ますなどの勇気付けをするなどの情緒的サポートも含まれている。情緒的サポートについて田副(2013)は、「ほめる・励ます・認めるなどの肯定的な評価・承認などは『価値のある人間として認められている』『私は大事に思われている』などというメッセージを含み喜びや自信をもたらす」<sup>2)</sup>と述べている。以上のことから、承認感を高めることにより、

生徒は自分自身に自信をもつことができるようになり、人間関係をより広げ、充実させようとする意欲が高まっていくのではないかと考える。

そこで本研究では、研究テーマ、研究課題を受け、学級や生徒の実態を踏まえた上でピア・サポートプログラムを実践する。このプログラムは、前半はピア・サポートのトレーニングを行い、後半は前半で学んだ内容を生かしてサポートを実践して振り返りを行う一連の活動である。ピア・サポートプログラムに取り組み、他者をサポートするピア・サポーターを育成する過程を工夫したり、認め合う場面を意図的・計画的に取り入れたりすることにより、個々の承認感が高まり、自信をもって他者と関わろうとする生徒を育成することができるのではないかと考え、本目標を設定した。

### 3 研究方法

- (1) 先行研究や文献を基にしたピア・サポートと承認感についての理論研究
- (2) 「Q-U」アンケートや承認感についてのアンケートを基にした生徒の実態把握
- (3) 承認感を高める支援を取り入れた授業実践の検討

### 4 研究内容

- (1) 先行研究や文献を基にピア・サポートの活動内容を検討して、ピア・サポートプログラムの作成を行う。
- (2) 所属校2年生において「Q-U」アンケートや承認感についてのアンケートを行い、その結果を分析してピア・サポートプログラムの内容構成の基礎資料としたり、生徒の実態を把握したりする。
- (3) ピア・サポートプログラムを実践し、実践後の承認感に関するアンケートやサポートに関するアンケートを基に、個々の承認感を高める手立ての有効性を考察する。

### 5 研究の実際

- (1) 文献による理論研究

#### ア 承認感について

田副は、「ほめる・励ます・認めるなどの肯定的な評価・承認などは『価値のある人間として認められている』『私は大事に思われている』などというメッセージを含んでおり、喜びや自信をもたらす。またそのような体験を積み重ねていくことで自分に自信がもて、行動が積極的になり、その結果成功体験が増え、他者からさらに承認されることが多くなる」<sup>2)</sup>と述べている。このことを踏まえ、自信をもって他者と関わるためには、他者からの肯定的な評価・関心・承認によって獲得していく承認感を高めていくことが必要であると考えた。

#### イ ピア・サポートプログラムについて

ピア・サポートプログラムとは、学校教育活動の一環として、教師の指導・援助の下に、子どもたちが互いに思いやり、支え合い、助け合う人間関係を育むために行う学習活動のことである。子どもたちが思いやり、支え合い、助け合うということは、自然に生じることもあれば、教師の意図的な介入によって作り出されることもある。子どもたちが思いやり、支え合い、助け合うという事実を、各学校の実態に応じて作り出すための意図的なプログラム型介入のことを、ピア・サポートプログラムと呼ぶ。その実践過程は、導入、トレーニング、プランニング、実践、反省・評価という順序に従って展開される。

#### ウ ピア・サポートのトレーニングで行う内容について

次頁表1は、構成的グループエンカウンター(以下、SGE)、ソーシャル・スキルトレーニング(以下、SST)、グループワーク・トレーニング(以下、GWT)の効果をまとめたものである。

本研究では、学級内のリレーションを高め、サポートの実践に必要なスキルの向上や集団への望ましい行動への変容をねらいとして、実態調査の結果の分析を参考にピア・サポートのトレーニングとして、SGEとSSTとGWTを1時間ずつ行うこととした。

表1 SGE, SST, GWTの効果

技法	SGE	SST	GWT
効果	グループによる親密な人間関係の体験を通して自己発見を促し、個人の心理的成長を促進する。あたたかい人間関係をつくり、支持的風土づくりに効果がある。	良好な人間関係をつくり保つための知識と、具体的な技術やここのトレーニングを通して、学校適応を促し、仲間関係を築く。思いやりや共感性や役割取得などの向社会的行動の発達を促進させる効果がある。	グループで課題を解決し、互いの活動を認め合う活動を通して、個人の心理的成長と社会的成長(集団への行動変容)を促し、グループとしての成長を促進させる効果がある。

## エ 研究の構想

本研究では、生徒同士が思いやり、支え合い、助け合う場面を意図的につくり、学級全員にピア・サポーターを体験させることで、全ての生徒が他者からの肯定的な評価・関心・承認を得る機会をもつことができると考えて、6時間のピア・サポートプログラムを設定することとした(図1)。1時目から3時目をトレーニング期、4時目から

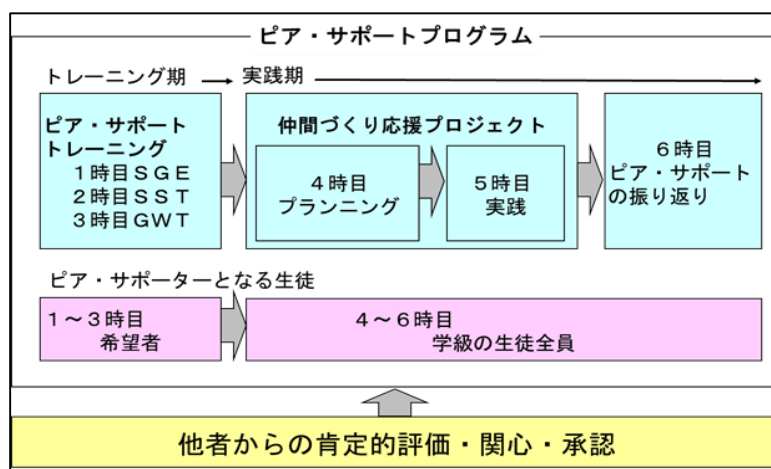


図1 研究の構想

6時目を実践期として設定し、5時目は1年生の全6学級に対して「仲間づくり応援プロジェクト」のサポートの実践を行う。生徒の承認感を高める手立てとして、意図的グルーピング、ピア・サポーターの育成の工夫、認め合う場面の工夫を行った。

## (2) 事例研究

### ア 実態把握

#### (ア) 対象生徒Aについて

生徒Aは、5月に行った「Q-U」アンケートでは1人だけ要支援群にプロットされた生徒である(図2)。1年生のときは登校をしぶることや欠席が多かったが、2年生に進級後は欠席していない。学級では同じ部活動の特定の生徒と行動を共にしている。授業中に自ら発言することはほとんどなく、指名されて発言する時は声が小さい。グループ活動においては、日頃から行動を共にしている生徒が側にいるときは活動に参加できるが、そうでないときの活動は消極的である。何をしてもよいか分からずに個別に指示をされるまでじっとしていることもある。学校で行う生活アンケートには不満を訴える記述をすることが多い。「Q-U」アンケートには「いろいろな活動に誘ってくれる友人や気軽に話せる友人がいる」と回答する一方で「からかわれたり、ばかにされている」と回答しており、被侵害得点は31点である。

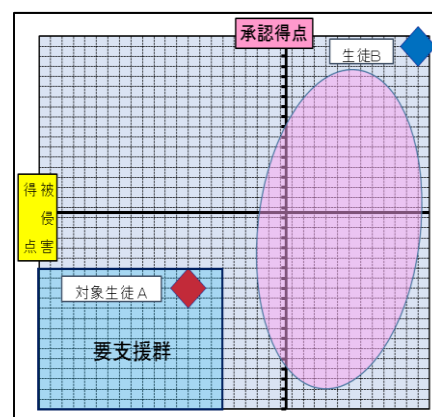


図2 「Q-U」アンケートの結果(5月)

また、「友人や先生から認められていない」とも回答しており、承認得点の合計は25点である。このことから、仲のよいグループに所属しているものの、孤立への不安から意思表示がうまくできずに学校生活への不満を募らせているのではないかと考える。

(イ) グルーピングで生徒Aのグループに配置した生徒Bについて

何事にも手を抜かず、学習も部活動も一生懸命努力する生徒である。穏やかで誰にでも優しく接することができるため、男女を問わず級友からの信頼も厚い。学級のリーダー的存在であり、友人関係も安定して良好であることから、生徒Aのよいモデルとなると考え、ピア・サポーターとして生徒Aのグループに配置することとした。

イ 承認感を高めるための手立て

(ア) 意図的グルーピング

ピア・サポートプログラムを実践するに当たり、まず、事前に活動メンバーについてのアンケートを行い、ピア・サポーターを募集する。次に、配慮が必要な生徒がグループでの活動に安心して取り組むことができるように、同じグループにピア・サポーターを配置する。その後、生徒の人間関係や男女の人数のバランスに配慮して、5～6人のグループを6班編成する。授業後のアンケートにグループについての質問項目を設け、次時のグルーピングの参考として、変更が必要なグループはメンバーの変更を行う。このようにして1～3時目までのグルーピングを行い、実践期のグループのメンバーを確定することとした(図3)。

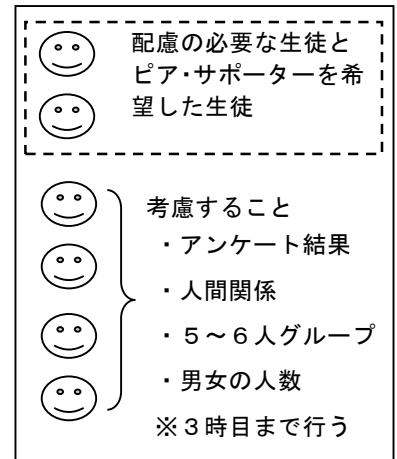


図3 グルーピングの方法

(イ) ピア・サポーターの育成の工夫

a 段階的なピア・サポーターの育成

トレーニング期の1時目から3時目は、毎時間ピア・サポーターを募集して希望した生徒全てをピア・サポーターとする。事前打合せでサポートのプランニングを行い、授業の中でサポートを実践させて、他の生徒へのモデルになるようにする。

実践期は、全員にピア・サポーターとしてサポートプランを立てさせ、グループごとに1年生の学級に行き、サポートを実践させることとした(表2)。

表2 ピア・サポーターの人数

時	人数
1	4名(生徒Bを含む)
2	8名(生徒A、Bを含む)
3	12名(生徒A、Bを含む)
4～	学級の生徒全員

b 生徒に示したサポートの仕方

プランニングの際に生徒がサポートの仕方をイメージできるように、サポートの過程(図4)と、サポートの必要な場面とサポートの例を提示する(表3)。

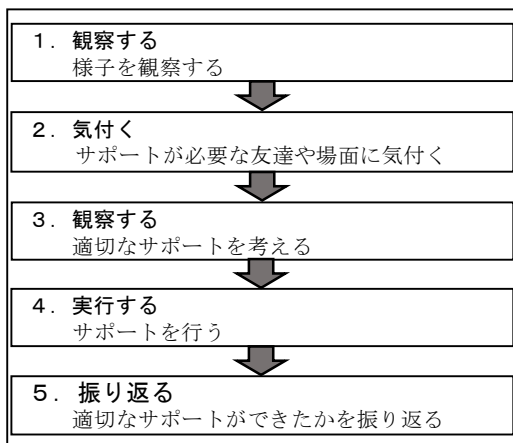


図4 サポートの過程

表3 サポートの必要な場面とサポートの例

サポートの必要な友達や場面	サポートの例
<ul style="list-style-type: none"> <li>自分から活動に参加できない</li> <li>活動中一人だけ違うことをしている</li> <li>何もしていない</li> <li>他の友達とコミュニケーションを取ることができていない</li> <li>元気がない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①社会関係のサポート 話を聞く、一緒に行動する</li> <li>②サービスサポート 具体的な手助けをする</li> <li>③情動的サポート アドバイスや情報を提供する</li> <li>④情緒的サポート ほめる・励ますなどの勇気付けをする</li> </ul>

c トレーニング期の授業の構成

図5は、トレーニング期(1～3時目)の授業の構成を示している。授業は、ウォームアップ、主活動のデモンストレーション、主活動、振り返りの4つの活動で構成する。

ピア・サポーターは、授業に向けて事前打合せを行い、ピア・サポーターの役割やサポートの仕方を考える。また、役割分担をして、各活動の計画や練習を行う。授業後には授業で行ったサポート活動の評価・反省を行う。

活動の技法がSGE, SST, GWTと変わっても生徒が徐々にトレーニング期の授業に慣れていくように、3時間を同じ構成にすることとした。

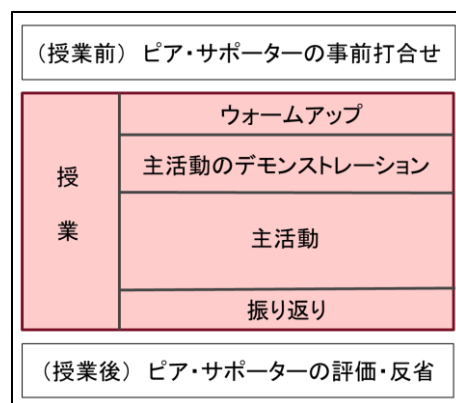


図5 授業の構成

(り) 認め合いの場面の工夫

授業の振り返りにおいて、以下のような工夫をすることとした。

トレーニング期の学級のリレーションが十分確立していない段階では、認め合う活動をできるだけ少人数グループで行い、生徒の実態に合わせて徐々に学級全体に広げて行うようにする。振り返りの内容は、グループで「積極的に活動した人」、「声を掛けてくれた人」、「困っているとき教えたり手伝ったりしてくれた人」等の肯定的な評価項目について、グループの全員の名前を挙げるようにして相互評価をさせる。1時目は振り返りカードに友達のよかったところを評価項目を参考にして記述させ、それを本人だけが見て確認できるようにする。2時目はグループで話し合って各項目に名前を挙げ、それを代表が学級全体に発表して全員で拍手をできるようにする。3時目はグループで話し合って各項目に名前を挙げ、項目ごとに名前の挙げた生徒を起立させて全員で拍手をできるようにする。

実践期の4時目は3時目と同様に振り返りを行う。5時目は「1年生仲間づくり応援」というテーマで、1年生の学級でグループごとに実践を行うため、6時目に振り返りを行う。6時目は、1年生からの「ありがとうメッセージ」を全員が受け取ることができるようにする。また、1年生の各学級の担任からの2年生へのビデオメッセージと、全てのグループの活動の様子をまとめたビデオを鑑賞した後、3時目と同様に振り返りを行うようにする。

ウ ピア・サポートプログラムの実践

(ア) トレーニング期(1～3時目)について

a トレーニング期の授業の計画

事前アンケートを行った結果、「仲のよい友達以外のことはよく知らない」、「新しい友達を作るときに何を話してよいか分からない」という生徒が多かったことや、学級と対象生徒の実態からグループのメンバーと協力して活動する体験をさせたいと考えて、3種類のトレーニングを組み合わせ構成した(表4)。ピア・サポーターにはゲーム的要素を入れたものをウォームアップに選び決定させた。1つの活動を短い時間に設定し、2つの内容で構成して変化をもたせた。

表4 トレーニング期の授業のねらいと内容

時	題 材	ね ら い	内 容
1	知り合うために	○リレーションを高め、学級内の相互理解や交流を促す	ウォームアップ「セブンイレブンじゃんけん」 主活動「SGE ごちゃまぜビンゴ」
2	話を伝えるには	○話すときのポイントを学び、実践を通して上手な話し方のスキルを身に付ける	ウォームアップ「じゃんけん列車」 主活動「SST 上手な話し方」
3	協力するために	○協力するためにはお互いを尊重し合い、苦手な部分は補い合うことが大切であるということに気付かせる	ウォームアップ「ナンバーコール」 主活動「GWT 人間コピー」



b 活動の実際と生徒Aの様子

電子黒板を使用して活動の見通しやねらいを提示したため、全員が活動を理解して参加することができた。ピア・サポーターは10分程度のウォームアップを進行し、主活動のデモンストレーションを行って全員に活動の仕方を説明した。また、グループの活動では自分から活動に参加できない友達に声を掛けて一緒に活動したり、発言を促したりした。生徒Aは、2時目からピア・サポーターとして活動し、主活動のデモンストレーションを行って全員から拍手を受けた。

(4) 実践期(4～6時目)について

a 実践期の授業の計画

実践期の授業の計画を、プランニング、実践、振り返りで構成した(表5)。実践の時間は、グループごとに1年生の教室に行き、主活動としてGWTを行った後に、仲間づくりについて2年生全員がメッセージを送ることとした。

表5 実践期の授業のねらいと内容

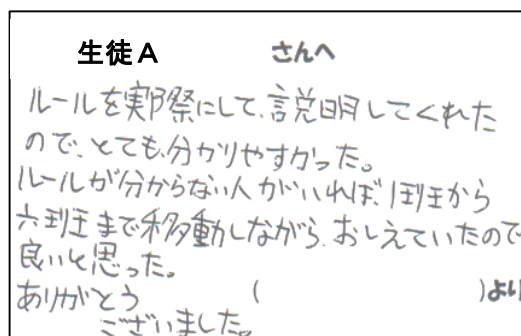
時	題 材	ね ら い	内 容
4	1年生「仲間づくり応援プロジェクト」のサポートプランを立てよう	○1年生の「仲間づくり応援プロジェクト」のサポートプランを立てさせる	サポートのプランニング
5	1年生仲間づくり応援プロジェクトを実践しよう	○1年生のための「仲間づくり応援プロジェクト」を実施し、プランニングを基に支援を実践させる	実践
6	仲間との関わり方について考えよう	○プランニングと実践を振り返らせ、学級の仲間の存在や学級の一員としての自分自身の在り方について考え、互いに支え合いながら学校生活を送っていることを感じ取らせる	ピア・サポートの振り返り

b 活動の実際と生徒Aの様子

4時目は、「1年生仲間づくり応援プロジェクト」の内容とサポートの仕方について、電子黒板で提示しながら学級全体に説明して活動のイメージをもたせた。全員が役割をもち、自分のできるサポートの場面を予想してサポートプランをワークシートに記入した。また、グループごとにリハーサルを行った。

5時目が始まる前の休み時間には、担当した教室前にグループごとに集合して、互いの役割を最後まで確認する姿が見られた。授業が始まると活動の進行をしながら、プランニングを基に自分達で考えたサポートを1年生に対して行った。振り返りの場面では、評価項目ごとに全ての生徒を起立させて拍手を送り、2年生一人一人から1年生へのメッセージを述べた。生徒Aは、休み時間の間、廊下で自分の話す内容のメモを何度も見て、同じグループの友達と最終確認を行っていた。5時目はウォームアップの説明を行った。また、生徒Bや教師からの声掛けがあった場合だけでなく、自分でその場で判断して1年生に声を掛けたり、各グループを回って活動の仕方を説明したりした。このとき、2年生の友達が困っているところをさりげなくカバーする場面も見られた。

6時目の振り返りでは、サポートプランを基にサポートを振り返らせた。全員が1年生からの「ありがとうメッセージ」を受け取った(資料1)。1年生のメッセージには「先輩が声をかけてくれてうしかった」、「僕も今日来てくれた2年生のようになりたい」などの記述があり、生徒はメッセージに見入っていた。その後、グループでサポート活動での互いの頑張りを確認して拍手を送りあった。生徒Aは6時目の感想に、これまでの活動を振り返り、ピア・サポートの活動を



資料1 生徒Aが受け取った1年生からのメッセージ

通して「人を思いやる力がついた」と記述した。

### (3) 生徒の変容と考察

#### ア 承認感の高まりについて

表6は、学級の生徒33名を対象にピア・サポートプログラムの実践の前後に行った承認感に関するアンケートの結果である。「学級の人あなたのことを大切にしてくれる」(存在承認)、「学級の人あなたの言っていることやしていることを認めてくれる」(行為承認)、「学級の人あなたの行ったよい行動を褒めてくれる」(結果承認)の3つの項目について5件法(とてもあてはまる=5, ややあてはまる=4, どちらとも言えない=3, あまりあてはまらない=2, まったくあてはまらない=1)で回答させた。その結果, とてもあてはまる, ややあてはまると回答した生徒の割合(人数)である。

表6 承認感に関するアンケート結果

n = 33

質問項目	事前(10月)	事後(2月)	増減
学級の人あなたのことを大切にしてくれる (存在承認)	72.7%(24名)	96.9%(32名)	+24.2%
学級の人あなたの言っていることやしていることを認めてくれる (行為承認)	90.9%(30名)	96.9%(32名)	+6.0%
学級の人あなたの行ったよい行動を褒めてくれる (結果承認)	69.6%(23名)	93.9%(31名)	+24.3%

学級全体として, 存在承認は24.2%(8名), 結果承認は24.3%(8名)増加した。存在承認は, 協力して行うような内容のグループの活動の中で, 友達から声を掛けてもらったり, 活動に参加できているかどうか気に掛けてもらったりしたことで自分のことを大切にされているという思いが高まったと考える。また, 結果承認は, 振り返りの場面で, 自分の行った行動をよい行動として肯定的に評価されたことで, 自分の行ったよい行動を褒めてもらうことができるという思いが高まったと考える。行為承認は, 事前(10月)で90.9%(30名)であったが, 更に6%(2名)増加した。

表7は, 授業ごとに実施した承認感に関するアンケートにおいて生徒Aがどのように回答したかを表したものである。

表7 生徒Aの承認感に関するアンケート結果

質問項目 \ 時間	事前	1	2	3	4	5	6
学級の人あなたのことを大切にしてくれる (存在承認)	2	3	4	4	4	3	4
学級の人あなたの言っていることやしていることを認めてくれる (行為承認)	3	3	4	4	4	4	4
学級の人あなたの行ったよい行動を褒めてくれる (結果承認)	2	3	4	4	4	5	4

とてもあてはまる=5, ややあてはまる=4, どちらとも言えない=3, あまりあてはまらない=2, まったくあてはまらない=1

2時目のアンケートではすべての項目に変化が見られた。生徒Aは, 2時目からピア・サポーターとして活動している。ピア・サポーターとしての役割をもったことで, 授業の中に生徒Aの出番ができた。グループの活動で認められるだけでなく, ピア・サポーターとしての活動についても学級全体の場で褒められたため, 生徒Aの承認感が高まったと考える。

#### イ 仲間同士によるサポートについて

次頁表8は, 学級の生徒33名を対象に授業ごとに行ったサポートに関するアンケートの結果である。「一人ではできないことがあった時は, 気持ちよく手伝ってくれる」(社会的サポート, サービスサポート)、「何かに困っていると知ったら, どうすればよいか教えてくれる」(情報的サポート)、「あなたが落ち込んでいると, 励ましてくれる」(情緒的サポート)の3つの項目について5件法(とてもあてはまる=5, ややあてはまる=4, どちらとも言えない=3, あまりあてはまらない=2, まったくあてはまらない=1)で回答させた。その結果, とてもあてはまる, や

やあてはまると回答した生徒の割合(人数)である。

表8 サポートに関するアンケート

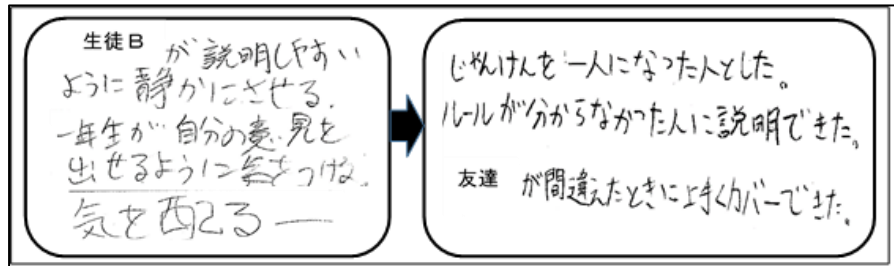
n = 33

質問項目	事前(10月)	事後(2月)	増減
一人ではできないことがあった時は、手伝ってくれる (社会関係的支持、サービスサポート)	78.7%(26名)	100%(33名)	+21.3%
何かに困っていると知ったら、どうすればよいか教えてくれる (情報的支持)	81.8%(27名)	93.9%(31名)	+12.1%
あなたが落ち込んでいると、励ましてくれる (情緒的支持)	75.7%(25名)	90.9%(30名)	+15.2%

全ての項目で増加している。これは、サポート例を具体的に示したことや、徐々に人数を増やしたピア・サポーターが他の生徒のモデルとなる行動を示したことにより、友達への好ましい接し方が分かり、サポートが必要な友達へ関心を向けることができるようになったためだと考える。

ウ 生徒Aの行ったサポートの行動について

資料2は、生徒Aの「仲間づくり応援プロジェクト」のサポートプランと振り返りである。生徒Bが進行しやすいようにと考えて「静かにさせる」というプランニングをしたほか、意見をうまく言え



資料2 生徒Aのサポートプランと振り返り

ない1年生に対してサポートを行うように考えていた。実際のサポートでは、生徒Bや教師の声掛けで、各グループを回ってゲームの説明をしたり、活動に参加できない生徒に声を掛けたりする場面があった。また、相手が見付けられずに、活動中一人である生徒に気付いて、自分から一緒にじゃんけんをしたり、2年生の友達が言い忘れたせりふに気付いて、代わりに言ったりと、活動の様子を観察して気付いた際には、すぐにサポートをすることができた。

表9は、生徒A、Bがピア・サポーターとして行ったサポートをまとめたものである。生徒Bは生徒Aだけのピア・サポーターではないが、生徒Aとの関わりのみを記述している。

表9 生徒A、Bがピア・サポーターとして行ったサポート

	生徒B(サポートする側)	生徒A(サポートされる側) ◎教師から見た生徒Aの様子
トレーニング期	<b>○ウォームアップゲームの場面</b> ・(事前打合せ)ウォームアップゲームを他のピア・サポーターと一緒に計画する。 ・(授業)導入で、全員にやり方を説明し進行する。	
	<b>○デモンストレーションの場面</b> ・(事前打合せ)デモンストレーションの練習を生徒Aと一緒に進行。 ・(授業)デモンストレーションを行う。	・(事前打合せ)デモンストレーションの練習に参加し、他のピア・サポーターの友達と役割分担をして、自分の役割の部分を何度も練習する。 ◎緊張していたが、みんなで練習できることが嬉しそうだった。 ・(授業)デモンストレーションを行う。 ◎とても緊張していた。
	<b>○振り返りの場面</b> ・(授業)最後に全体の前で活動の様子について褒める。	・(授業)グループの代表として全体の前で感想を述べる。 ◎うつむいて小さな声であったが、最後まで言うことができたことを友達から褒められて笑顔が見られた。
	<b>○グループ活動の場面</b> ・(授業)生徒Aと常に一緒に活動する。 ・(授業)生徒Aの発言を促す声掛けをする。 ・(授業)話し合いをスムーズに進める。	・(授業)生徒Bと常に一緒に活動する。 ・(授業)グループ全員分のプリントを配ったり、集めて提出したりする。 ◎自主的にグループの役に立とうと考えて行動した。



実践期	<b>○実践授業のリハーサルの場面</b> ・(授業)生徒Aとリハーサルをする。 ・(授業)生徒Aに発表の際「もっとはきはき話した方がよい」とアドバイスをする。 ・(授業)欠席の友達の役割も自主的に行う。	・(授業)生徒Bとリハーサルをする。 ・(授業)生徒Bからのアドバイスを受け、大きな声ではっきりと原稿を読む。 ◎何回もリハーサルを繰り返していた。授業後の感想に「もっと練習しないといけない」と記述した。
	<b>○実践授業での場面</b> ・(授業)進行をスムーズに行う。 ・(授業)1人である生徒に声を掛け、活動に参加するように促す。 ・(授業)全体の進行がスムーズに行われているか常に気を配る。 ・(授業)生徒Aに声を掛け、一緒に1人だけグループに入ることができなかった生徒に声を掛け、活動に参加するように促す。	・(授業)自分の役割であるウォームアップゲームの説明を分かりやすく行う。 ・(授業)同じ役割の友達が忘れた台詞をさりげなくカバーする。 ・(授業)主活動で1人だけグループに入ることができなかった生徒に声を掛け、活動に参加するように促す。 ・(授業)各グループを回ってゲームの説明を行う。 ・(授業)じゃんけんで一人だけペアがない生徒に気付き、一緒にじゃんけんを行う。 ◎自主的に行動する場面が多く見られた。

トレーニング期は、主に、生徒Bが生徒Aに対してサポートを行った。生徒Aは、2時目からピア・サポーターとして活動したが、生徒Bのまねをしたり、一緒に活動したりすることでどのようにサポートを行うのかを学んでいるように見えた。しかし、実践期に入ってから生徒Aの他者に対するサポートが増し、特に5時目の実践では、生徒Bや教師の声掛けがなくても、自分で気付いて1年生や同じグループの友達を積極的にサポートしていた。生徒Aは授業後の感想に「始めは何をすればよいか分からなかったけど、慣れてきたら友達のことを考えられるようになった」と記述している。

生徒Aにとって、生徒Bという行動のモデルとなる友達の存在があったことやピア・サポーターとして早い段階からトレーニングを繰り返してきたことが自信となり、5時目の実践での積極的な行動に結び付いたと考える。

表10は、授業ごとに実施したサポートに関するアンケートにおいて生徒Aがどのように回答したかを表したものである。

表10 生徒Aのサポートに関するアンケート結果

質問項目 \ 時間	事前	1	2	3	4	5	6
一人ではできないことがあった時は、手伝ってくれる (社会的サポート, サービスサポート)	3	4	4	5	4	4	4
何か困っていると知ったら、どうすればよいか教えてくれる (情報的サポート)	2	2	4	5	4	3	4
あなたが落ち込んでいると、励ましてくれる (情緒的サポート)	2	2	4	5	4	4	4

とてもあてはまる=5, ややあてはまる=4, どちらとも言えない=3, あまりあてはまらない=2, まったくあてはまらない=1

生徒Aは、事前のアンケートでは周りからサポートされているという意識が低かったが、1時目、2時目、3時目とサポートされている意識が徐々に高まっている。生徒Aは、1時目の授業後のアンケートの「次回も同じグループで活動したいですか」という質問に対して「あまりあてはまらない」と回答していた。そのため、生徒Aとの人間関係を考慮してグループを編成し直したところ、2時目以降は同じ質問に対して「とてもよくあてはまる」と回答した。また、授業後の感想に「友達と協力できてよかった」と記述していた。これらのことから意図的なグルーピングによって安心して自分の気持ちを話したり助けを求めたりする環境を整えたことや、SGE, SST, GWTなどの活動を通して、グループで交流することを繰り返したことで友達からサポートをされているという意識が高まったと考える。

エ 生徒Aのワークシートより

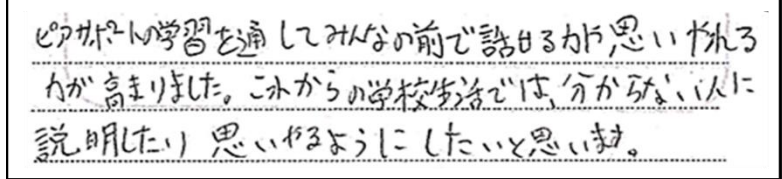
資料3は、2時目の生徒Aの感想である。初めてのピア・サポーターを経験して、戸惑いながらも生徒Bをまねた

11-月-21日-よかった。また11-月-21日-をしたい。  
次の授業も今日のようにしたい。

資料3 生徒Aの2時目終了後の感想

り、手順を確認したりしながら役割を果たそうと努力した。この経験が生徒Aにとって成功体験となり、次時への意欲につながったと考える。

資料4は、6時目の生徒Aの感想である。ピア・サポーターとしてトレーニングをしてきたことで、人前ではっきりと話すことや相手にとってどんなサポートが必要かを考えることを自分の力とし、それをこれから他者との関わりの中で生かしていこうという気持ちが表れている。



資料4 生徒Aの6時目終了後の感想

友達との関わりが広がらず学校生活に不満を抱えていた生徒Aが、人に支えられるだけでなく、支えていこうという気持ちへ変容していったことがうかがえる。

## 6 研究のまとめと今後の課題

### (1) 研究のまとめ

#### ア 対象生徒について

本研究を通して、意思表示がうまくできず友達との関わりが広がらない生徒や、周囲から認められていないと感じている生徒が承認感を高め、自信をもって他者と関わろうとする意欲を喚起するために、ピア・サポートプログラムにおける次の手立ては有効であることが分かった。

- ・ 安心して発言したり、行動したりすることが出来るようなメンバー構成で、意図的にグループを編成すること。その際に、グループの中に、モデルとなる生徒を配置すること。
- ・ どのように行動すればよいのか、行動の仕方を具体的に示すこと。その際に、口頭で説明するだけでなく、文字にしたり、モデルとなる行動を見せたりして、視覚的に示すこと。
- ・ 肯定的な評価項目を設定して相互評価させる場面では、生徒の実態に応じて認め合う場면을工夫すること。

#### イ 集団について

生徒同士の関わりが限定的で広がっていない学級集団において、ピア・サポーターを段階的に授業の中で育成していったことは、学級の交流を促し、一人一人の承認感を高めることに有効であった。

### (2) 今後の課題

校内で、ピア・サポートを今後も継続して実践するために、中学校の3年間を見通して学年に応じたピア・サポートプログラムの計画の作成と実践のための時間確保をする必要がある。

#### 《引用文献》

- 1) 春日井 敏之編著 『ピア・サポート実践ガイドブック』 2008年 ほんの森出版 p. 16
- 2) 田副 真美 『児童心理 臨時増刊10月』 2013年 金子書房 p. 80

#### 《参考文献》

- ・ 中野 良顯 『ピア・サポート豊かな人間性を育てる授業づくり』 2006年4月 図書文化社
- ・ 堀 洋道監修 『心理測定尺度集Ⅲ』 2001年8月 サイエンス社
- ・ 國部 康隆編著 『構成的グループエンカウンター事典』 平成16年 図書文化社
- ・ 相川 充編著 『実践ソーシャルスキル教育中学校』 2006年 図書文化社
- ・ 日本学校GWT研究会 『学校グループワーク・トレーニング』 2003年 遊戯社
- ・ 稲垣 友仁 『児童心理 臨時増刊6月』 2010年 金子書房